

---

---

調査・実践報告

---

---

「グローバル市民のための英語」を振り返る  
－カリキュラムの黎明・創成から発展を目指して－

今井 純子<sup>1)\*</sup>

【要 旨】

本報告では、2015年に創設された国際教養学部における2年次必修英語科目「グローバル市民のための英語」(English for Global Citizenship; EGC)の黎明・創成期における授業実践を振り返り、内容重視の英語カリキュラムとしてのさらなる発展を狙いとする。まず、当該学部での英語教育プログラムの全体像とそこにおけるEGCの位置づけを把握するため、黎明期に内容言語統合型学習(Content Language Integrated Learning; CLIL)を裏付けた理論背景、1年次必修英語科目が当初目指したもの、他大学には見られないプログラムの独自性や特徴を概観する。その上でCLILの一事例として、地球規模の課題についての学びを通してアカデミック英語を伸ばすEGCが、科目で扱う6つのモジュール・テーマの軸となる要素として、創成期に「持続可能な開発目標」(SDGs)を導入した背景と、導入後の教材開発や教育実践における試みを紹介する。学生によるカリキュラムの評価として、学期末アンケートの結果とSDGsについての授業後のコメントを紹介する。最後に、明らかにされるべきニーズ、科目や学年を超えた情報共有の価値、地球規模の課題の「自分ご」化を促す教材作成など、今後のカリキュラム発展のための展望を、黎明・創成期にカリキュラム開発と科目運営に関わった教員の一人として一考察を示す。

キーワード：内容言語統合型学習 (CLIL)、地球市民、持続可能な開発目標 (SDGs)、カリキュラム開発

---

---

Practical Research Reports

---

---

A Reflection and Report on “English for Global Citizenship”:  
How the Curriculum Started, Has Evolved, and Will Develop Further

Junko IMAI<sup>1)\*</sup>

【Abstract】

English for Global Citizenship (EGC) is a four-credit course required for sophomores in a university's faculty of international liberal arts established in 2015. As one of the curriculum-designers and the course administrators, the author reflects on the first four years of its development with the aim of exploring strategies to further develop it as part of the department's English teaching program. The paper reviews the program's theoretical background from a Content Language Integrated Learning (CLIL) perspective, examining the initial objectives of the English curriculum, and the course's unique educational initiatives. It describes the CLIL-based global issues curriculum, which uses content to build academic English skills, explains the rationale to incorporate Sustainable Development Goals (SDGs) as a connecting principle for discrete themes covered, and describes how the SDGs were introduced via in-house materials and workshops. The article reports the results of a survey administered over six semesters in which students expressed interest in the course materials and valued their experience. In closing, the article discusses how EGC could be further developed by considering curricular and student needs, the importance of sharing educational goals beyond English, and the value of designing materials which encourage students to embrace global issues as their own.

**Key words:** Content language integrated learning (CLIL), Global citizen, Sustainable development goals (SDGs), Curriculum development

---

<sup>1)</sup> 順天堂大学・国際教養学部 (Email: j-imai@juntendo.ac.jp)

\* 責任者名：今井 純子

[2020年9月27日原稿受付] [2020年11月27日掲載決定]

## 1. はじめに

内容言語統合型学習 (Content Language Integrated Learning; CLIL) (e.g., Coyle, Hood, & Marsh, 2010) は、教科や時事問題、異文化理解などを目的としたトピックの内容を、習得を目的とした言語と統合して学ぶ教育的アプローチである。通常、日本の大学英語教育では、単独の教員が担当するスキルをベースとした週1コマ単位の授業を基本としており、CLILを取り入れている例やチームでの授業運営は少ない。そのような中で、2015年に開設されたA大学国際教養学部の1、2年次必修英語科目は、CLILと複数教員による授業を実現する珍しい事例といえる。

本報告では、2年生を対象とした「グローバル市民のための英語」(English for Global Citizenship; EGC) について教育実践を振り返る。対象とする期間は、2015年から2019年とし、学部開設後の開講準備 (2015年) から1期生を対象にEGCを開講した2016年をカリキュラム黎明期、初年度 (2016年) を踏まえ、地球規模の課題を扱う科目に、持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals; SDGs) を導入していった2017年から2019年までをカリキュラム創成期ととらえることとする。また、2016年から2018年に実施した学期末アンケートにおける学生からの評価や感想を報告する。最後に、2020年から (現在) をカリキュラム発展期ととらえ、今後の展望をカリキュラム開発者の視点から考察する。

## 2. 黎明・創成期におけるプログラムの全体像

当該学部では学部が新設された2015年より、言語と文化の結びつきを主張する *linguacultural* /*linguaculture* (e.g., Agar, 1994; Diaz, 2013) の理論に基づき、英語教育において内容と言語両面に焦点を当て学習効果を高めるCLILを展開してきた。Shaules (2016) では、*linguacultural* 的学習過程について、文化との出会いの蓄積 (*encountering*)、文化の違いや類似性への気づ

き (*experimenting*)、自己表現や文化的視点の統合 (*integrating*)、多様な言語・文化への寛容性と複眼的視点の確立 (*bridging*) の4つの段階が示されている。

このような背景で、1年次必修英語科目 (*Interactive International English*; IIE) では、2015年度から2017年度に、学部1～3期生を対象に、アイデンティティ、言語使用に内在する文化的側面、カルチャーショック等、異文化コミュニケーションの基礎となるテーマを扱った。また、出身、性別、文化背景、選択外国語の多様性を尊重した少人数クラス編成の中、グループワークを中心とする協働学習 (*collaborative learning*) と授業外での自主性を重んじた自律学習 (*Autonomous learning*) を推進した。今井 (2017) では、アカデミック・ライティングの過程を観察し、エッセイ完成までに行われたグループワークにおいて学生が異文化と言語への気づきをどのように話し合い、エッセイの質と語彙使用がどのように変化したかについて、質的内容分析を行った。4期生が入学した2018年以降は、英語試験対策演習の強化、能力別クラス編成、定員倍増、カリキュラム改変、留学制度導入等、様々な要素が加わり、スキル面をより重視する傾向と試行錯誤が続いている。

一方、本報告が主題とする2年次英語科目 (EGC) では、1年次必修英語科目の他、概論・基礎教養科目との横断的学びを踏まえ、地球的課題について国内から国外の順で目を向け問題解決を試みる流れで *linguacultural* 理論に準ずるCLILを実践している。3、4年次科目が展開されていなかった黎明期においては、担当教員の話し合いや学生の観察から草の根的にテーマを扱った。IIEのような試行錯誤を繰り返しながらも、EGCでは幸い内容重視の英語教育が定着し継続的に発展している。結果的に、創成期においては、学部が目指す地球市民の育成、3、4年展開科目との縦断的な関連も見られ、カリキュラムの成熟・発展を目指すべき新しいフェーズを迎えることとなった。

この他、既存の大学英語教育にはみられない特徴としては、15名以内の少人数クラスによる協働学習の推進（図1）、リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの4技能を生かしてのインターアクションを始めとする発信型課題の導入、言語ラーニングセンターでのカウンセリング等自律学習支援、日本語・英語ネイティブの教員2名によるペアティーチングによる週4回の授業、英語を他外国語と並列させる複言語主義の尊重などが挙げられる。また、再履修を除く全ての授業を常勤の教員が通年で担当しており、きめ細かい指導の徹底や、教員と学生、学生間での深い信頼関係が築かれる仕組みが形成されている。



図1. EGCでの協働学習の様子

### 3. 「グローバル市民のための英語」での実践

#### 3.1. カリキュラムの概要

EGCは、当該学部における2年次必修英語科目であり、週4コマ通年で開講されている。CLILアプローチを取るカリキュラム展開を目指しており、内容面では、前期は主に国内におけるグローバル課題（インバウンド・ツーリズム、和食、ジェンダー）を扱い、「あたり前」と疑わなかった・見過ごしていた自文化への気づきを促す。後期の授業では、世界規模の課題（気候変動、貧困、平和と紛争）を扱う。また、1・2年次英語学習のまとめとして、問題解決に向けたアクションプランを学生各自が考案

し、1月にポスター発表を行う。

言語面では、英語試験でのスコアにもつながるアカデミック・イングリッシュのスキルアップを、様々なアウトプット活動を通して目指す。例えば、1年次に培ったプレゼンテーションスキルを応用し、グローバルな問題についてのディスカッションやディベートを行い、理論的かつ批判的な思考を養う。ライティングでは、パラグラフ構成の知識を発展させ、自己が設定したテーマを読み解いた上で、より長いエッセイを執筆したり、リサーチや成果をポスターとしてまとめたりするなど、発信型活動を豊富に盛り込んでいる。リーディング・リスニングといった受信型スキルについても、多読や英語試験の問題演習の習慣化を狙い、定期的な模擬試験の実施や、カウンセリングで自律学習を促しモデルを示す等、支援体制を整えている。

これに加え、EGCならではの教員体制もカリキュラムがオリジナリティを保つ上で大きな役割を担っている。2016年から2019年は10クラス、入学者の定員倍増を受けて2020年からは20クラス想定<sup>1)</sup>で編成しており、専任教員3名を含む16名の常勤教員が携わっている。授業は日本語・英語ネイティブの教員がペアで、1クラスにつき各2コマ（計4単位分）を担当するが、教材開発から次年度への計画に至るまで全教員がチームとして協働している。

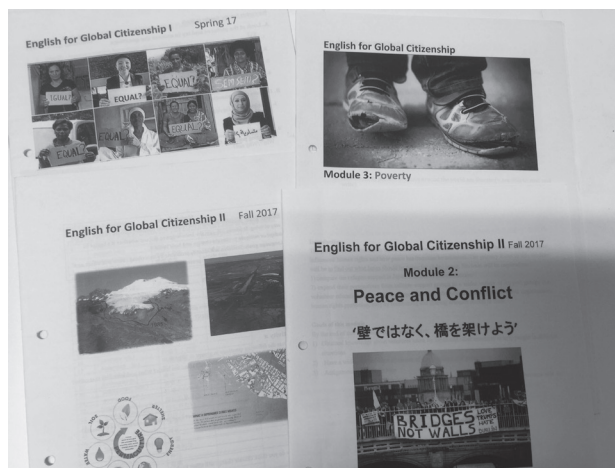


図2. EGCモジュールのオリジナル小冊子

教材は、既存の教科書を使わず、新聞・ニュース映像などオーセンティックな素材をもとに毎学期担当教員がアクティビティーを考え小冊子(図2)を刷新するモジュール制を導入している。小冊子には、新聞記事をベースとした読解教材、ニュース映像のディスカッション、リサーチを元としたライティングやプレゼンテーション課題の他、2020年度からは各モジュールに関連するトピックでTOEFL出題形式に倣ったリスニング問題を独自に作成し学習方法の提案を行っている。答えが1つに限らないグローバルな問題について、各教員がそれぞれの経験や立場から多角的な視点を提供し、得意分野や持ち味で互いに補完し協働する姿を見せることが、地球市民を育てる上で重要なことと捉えている。情報共有や意見交換の為に教員ミーティングを定期実施し、授業内容や課題についても臨機応変な対応を行なっている。

### 3.2. サステナビリティの導入

2015年入学の1期生が2年に進級した2016年当初のEGCカリキュラム(黎明期)にはサステナビリティという要素は含まれておらず、2017年も言語教育、人口問題、国際協力など新しいテーマで試行錯誤を行った。2018年度以降、より深い内容理解と英語試験対策の強化、SDGsの動き(後述)や学生の興味・関心を考慮し、カリキュラム創成期を通して、現在までに「インバウンド・ツーリズム、和食、ジェンダー、気候変動、貧困、平和と紛争」の6つにモジュールが絞られている。

一方、国連では2015年に「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、17の開発目標が掲げられた。このSDGsは本邦でも注目され、文部科学省による「ESD(持続可能な開発のための教育)推進のための手引」(2016)の働きかけを始め、多くの学校が、教育を通してESDを推進するユネスコスクールとして登録し、カードゲームやブロックを使ったワークショップが開催されるようになった。SDGsに

ついて高校で既習の学生も散見され、就職活動においても社会的責任(CSR)活動の一環としての企業のSDGsへの取り組みは一指標となっている。これらの流れから、グローバル問題を扱う当学部では、SDGsの共通理解による社会的要請への応答は不可欠と思われた。

そこで、地球市民の英語を身につけさせるEGCでは、学習内容の意義づけや動機付けを狙い、当初予定していた8~10のモジュール数を2018年に6つに絞り、各モジュールとSDGsの紐付け(表1)を行った。具体的には、小冊子の冒頭に、関連するSDGsについて国連が公開する資料やデータを折り込み、モジュールとSDGsの関連性について意識づけをした。また、開始時や余った時間に、他のモジュールやSDGsとの結びつきについて定期的なディスカッション活動を盛り込んだ。

表1. EGCモジュールとSDGsの紐付け例

	Module	SDGs
EGC 1 前期	1. Inbound Tourism 2. Washoku 3. Gender at Work	8, 9, 11 2, 12, 13, 14 4, 5, 10
EGC 2 後期	1. Climate Change 2. Poverty 3. Peace & Conflict	7, 12, 13, 14, 15 1, 2, 3, 6 16, 17

加えて、通常少人数で授業運営している本科目であるが、SDGsの基礎概念の理解、共通の課題への動機付け、クラスを超えた協働を狙い、2018年度からは著者を中心に複数クラス合同のオリエンテーションを実施している。以上の取り組みを経て、サステナビリティを6つのモジュールに共通する目標として掲げるEGCカリキュラム(図3)が定着した。

以上の動きと並行し、英語以外の1、2年次教養・概論科目、3年次以降の展開科目においても、SDGsを扱うことが2018年以降年々多くなっており、科目や学年を横断・縦断した学びが実現できたことも、思いがけない巡り合わせとなった。

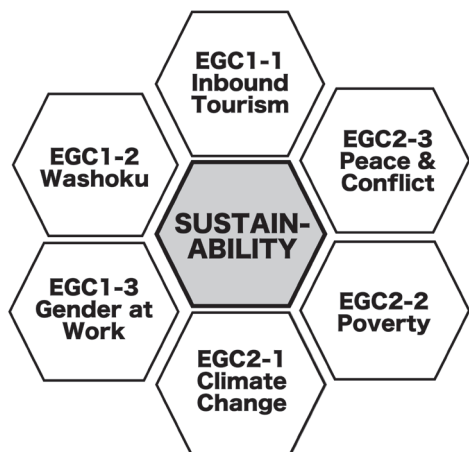


図3. EGC モジュール (2020 年度現在)



図4. 1年生合同授業でのポスターの例

### 3.3. SDGs 導入後の教育実践例

SDGs の EGC カリキュラムへの導入は、モジュール小冊子の刷新とディスカッション活動導入から始まったが、高校や学部での SDGs に係る学習体験も滑車となり、日常的に受け入れられ浸透していった。ここでは、担当教員の全面的な協力のもと、著者が実施した合同授業2種と学年末恒例のポスター発表の取り組みを紹介する。

まず、2018 年度最後の授業日 (2019 年 1 月 24 日) に IIE の 1 年生 (全 10 クラス編成) を対象として、次年度の EGC の紹介、及び、“What is happiness” というテーマのワークショップを 5 クラスずつの合同で 2 コマ実施した。この授業に参加した学生の約半数が、同夏に初めて行われたフィリピン・セブ島での語学研修に参加していたことから、振り返り学習も兼ねての開催となった。ここでは、SDGs を「幸せに関する人類共通の課題としての世界の取り組み」として紹介した。また、同年、著者が参加した教育実践助成プログラム (SDGs4.7 Open Lab) で同席し、都内の私立高校とフィリピン・セブ島の小学校にて同じテーマで授業実践を行った現役中学・高校教員が生徒と共に作成した動画を拝借し、視聴した。その後、クラス単位で皆が幸せになる条件について付箋を使った KJ 法で意見を出し合い、図 4 のようなポスターを作成し、全体で発表を行った。

EGC 受講中の 2 年生を対象としては、後期の最初 (2018 年 10 月 4 日、2019 年 10 月 17 日) に、SDGs と後期共通課題の導入を目的とした 5 クラスずつの合同授業を 2 コマ行っている。最初に、前期から度々授業内で話題に出した SDGs について動画やスライド、穴埋めのハンドアウトを使い、再度説明を行った。その後、メインの活動として、ジグソー法<sup>2)</sup>により、複数の SDGs について理解を深めた。続いて、クラス毎に 17 の目標の関連性についてロゴを並び替えて話し合う時間を設け、ディスカッションの結果を全体に向けて発表した (図 5)。最後に、全クラス共通課題として例年行っている、エッセイとポスター・プレゼンテーションについて、前年度の優秀作品をモデルとして提示しながら、説明を行った。詳細は今井 (2019)



図5. 2年生合同授業でのポスターの例

を参照されたい。

EGC では、2016 年より学部での英語学習の集大成として、後期末に学生がポスターを作成し成果発表会を行なってきた。事前学習として、学生は前期から、モジュールのテーマと各自が関心を持つグローバル課題に関連して新聞・ニュース記事を収集し、重要語句、サマリー、リアクションをイシュー・ログに定期的に記録する (図 6)。

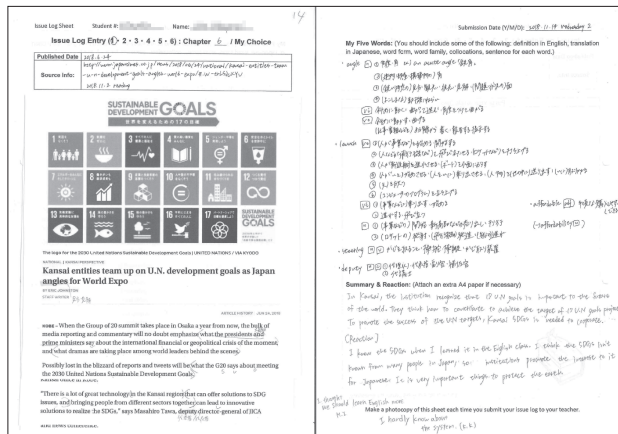


図 6. イssueログの例

前述の後期合同授業後には、テーマを絞り、文献リサーチを行い、学術論文やより長文のニュース記事を探し、アカデミックな形式で要約を書き、文献の関連性とそこから学んだことについて、レファレンス・サマリー<sup>3)</sup>にまとめる (図 7)。

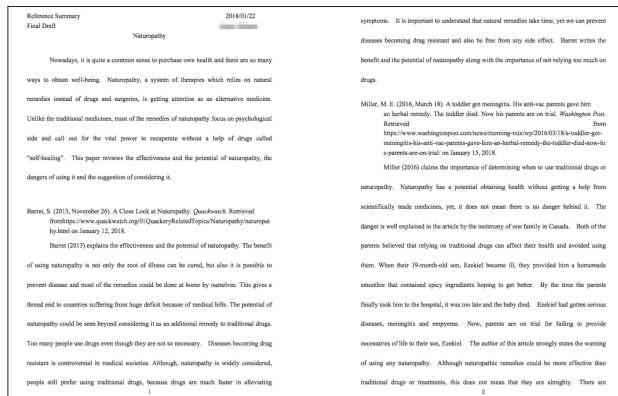


図 7. レファレンス・サマリーの例

事前準備を経た上で、リサーチを踏まえて自らのアイデアを入れたポスターを作成する。後

期最終日に教室や廊下の壁にポスターを掲示し、聴衆にクラスを開放する慣例となっている (図 8)。






図 8. ポスター発表の様子

2018 年度は、グローバル課題について解決を導くアクションプランを SDGs と紐付けて発表を行った。続く 2019 年度は、図 9 のように

## AY 2019–20 English for Global Citizenship OPEN HOUSE

### POSTER PRESENTATION SHOWCASE

~ What can we do for a sustainable 2030?~






**WHEN? THURSDAY JANUARY 23**  
**WHERE? Rooms 602, 604, 606, 608, 610**

Second year students will propose action plans for various global issues associated with SDGs based on their 2 years of English study at Juntendo.

**Timetable**  
 Showcase 1 Showcase 2  
 1st Period: 9:10-9:40 9:50-10:20  
 2nd Period: 10:50-11:20 11:30-12:00

**ATTENTION AUDIENCE!**



**Best Poster Award**

Please paste stickers to posters you enjoyed (one sticker for each poster). Stickers will be provided through EGC teachers. Thanks ☺

- Blue: Second year students
- Orange: All other students
- Purple: Teachers

\* Stickers from EGC teachers may have more points, so the number of the stickers does not simply decide the award, but it surely shows that presenters had more visitors ☺




図 9. ポスター発表の告知文 (2019 年度)

学部全体に告知した。“What can we do for a sustainable 2030?”という共通テーマを提示し、各クラスのベストポスターアワードを選出するなど、プレゼンテーション・ショーケースとしてイベント性をさらに持たせた。当日は、学部長はじめ、展開領域（グローバルヘルスサービス、グローバル社会、異文化コミュニケーション）の複数の教員、1年生240名の内、当日都合のつかなかった一部のクラスを除くほとんどが参加した。2020年度は、新型コロナウイルス流行の影響による授業形式の変更を踏まえ、“Sustainability and New Normal”というテーマでオンライン開催となった。

#### 4. 学生からの評価

##### 4.1. EGCについての学期末アンケート

言語プログラムにおけるカリキュラム開発にはニーズ分析が必須である（e.g., Brown, 1994）。EGCもその原則に従い、2015年から2018年に渡り、カリキュラム全体、授業形式、学習意欲、授業内外での学習体験、要望、長期休暇中の学習予定など、広範な内容について、学生の自己評価を聞き、ニーズ分析を目的としたアンケートを実施した。アンケートはオンライン形式で行い、各学期の授業最終日に授業を通して配布し、回答は任意としたが、定員の4分の3にあたる学生から回答を得た（表2）。アンケートでは、全部で30の項目について、文章を提示し、学生は、各文について、自分の意見や評価を4つのスケール（強くそう思う、そう思う、あまりそう思わない、全くそう思わない）から選択して回答した。また巻末には、自由コメント欄も設けた。以下には、本稿に関連する6項目（I: テーマ、II: 教材、III: 学習意欲、IV: プレゼンテーション、V: ライティング、VI: 自律学習）に絞り、結果を抜粋する。

内容面については、テーマや教材に関係する項目（項目I、II）に目を向けると、地球規模の課題を扱い、メディアを素材としたオリジナル小冊子を使うことについて、7割以上の学生

表2. アンケート回答者数（120名定員）

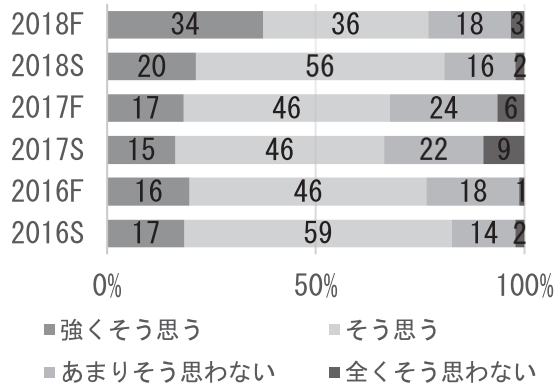
年・学期	回答者数（人）
2018年後期（F）	91
2018年前期（S）	93
2017年後期（F）	93
2017年前期（S）	92
2016年後期（F）	80
2016年前期（S）	92

から賛同を得ており、「強くそう思う」学生も年々増加の傾向にある。学習意欲（項目III）については、2017年、2018年とも、後期に「強くそう思う」（38%、22%）が顕著で、ポスター発表に向けた取り組みの影響や、EGCが扱う内容への関心の高さが伺える。

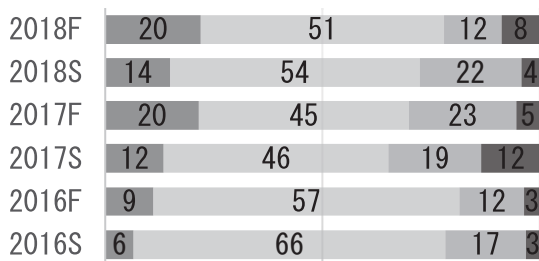
言語面については、スピーキング（省略）、プレゼンテーション（項目IV）、ライティング（項目V）等の発信型スキルが向上した（「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生が多く見られた。特に、プレゼンテーションでは、2016年前期と2018年前期以降、ライティングでは、平均で3分の2の学生が前向きな回答をした。一方、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」と判断した学生も一定数いた。2016年後期から2017年後期は、約半数がプレゼンテーション能力の向上について否定的であった。ライティング能力の向上についても、平均すると3分の1の学生が「全くそう思わない」「あまりそう思わない」と判断している。リーディング（省略）、リスニング（省略）等の受動型スキルでも、同様の傾向が見られた。以上のことから、内容面への高評価と対照的に、言語スキルの自己評価には、学生間のばらつきや学期毎の推移があることが伺える。

内容・言語面について、肯定的な回答が大多数を占めた一方で、授業外での取り組みについては、異なる回答傾向が見られた。特に、興味深い読み物を見つけることができたか（項目VI）を問われた際、過半数の学生が否定的な答えを選択している。前期に英語試験対策演習を強化し、後期にSDGsを導入した2018年に

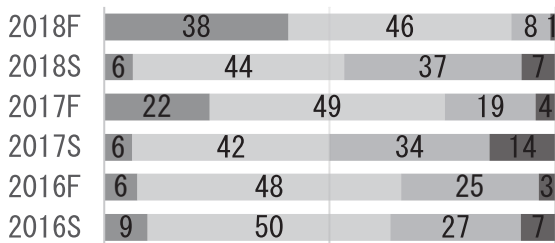
I 授業で扱ったテーマは意味のあるものだった



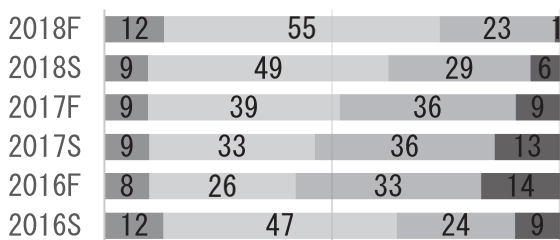
II 授業で使った教材は良かった



III 学習意欲を維持することができた



IV プレゼンテーション力が向上したと思う



V ライティングが向上したと思う



VI 興味深いリーディング教材を見つけることができた



向けて、学生の内容への関心、言語スキルの自己評価は上昇傾向にあったものの、自主学习における教材選択や各スキルへの苦手意識等、課題も残ったことがうかがえる。

4.2. SDGs へのコメント

2018年10月のワークショップでは、事後に学生からコメント（英語または日本語で任意記入）を収集した。以下に、代表的な感想を抜粋する。

[17のSDGは]どれも大切で世界中で考えそのゴールを達成するために努力しなければいけないと思った。

クラスの垣根を超えて、考えたことなどを共有できたのは新鮮であり、とても良い機会だと思いました。

I can tell my friends and family. I can't achieve alone. We need to do a little thing all together. Then everyone have to know SDGs and I can tell many people in Japanese and English.

上記にも見られるように、合同授業は、学生がSDGsを自分と関連づけ、身近にいる人たちにどう働きかけられるかを、前向きに考えるきっかけを与えられたようである。また、クラスの枠を超えた学習についても学習意欲や新たな形での協働として、肯定的にとらえられたようである。

#### 4. 今後に向けて

EGCでは、黎明期・創成期を通して、グローバルなテーマを内容とし、学習成果を発信する課題を通して学生がアカデミック英語のスキルを運用する機会を設けてきた。本科目は、少人数クラスでの協働学習、自律学習支援、複言語主義というカリキュラム黎明期の特徴をできる限り維持しながらも、創成期には科目内外からの様々なニーズに対応し、内容重視の英語教育を継続する独自の岐路を見出してきた。英語試験対策とSDGsを中心とするモジュール学習の連結については、学生から概ね良好に受け入れられている。一方で、英語力向上に実感を得られていない学生や自主学習での教材選択に迷う学生も一定数いることが、アンケート回答とその推移から予測できる。

スタートから5年を経た今、EGCにおけるCLILカリキュラムが発展期を迎えるために、2年次必修英語科目への入り口と出口のニーズを再確認する必要があるように思う。1年次において習得しておくべきスキルや知識にはどのようなものがあるのだろうか。また、3年次以降の領域学習や卒業後の進路に向けてどのような人材育成を学部全体が目指し、社会から望まれるのか。現在EGCでは、ポスター発表で地球規模の課題について批判的考察を経て独自の問題解決を提案することを一到達目標としているが、それらニーズが分かると、抑えるべき内容がより明確になると思う。これを実現するためには、学部におけるあらゆる教育部門やその他ステークホルダーを巻き込んでの情報共有が必須である。学部や英語プログラムが前提とする価値、思い描く姿が明らかになると、自ずとEGCの学部内での役割も明確となるのではないか。科目独自の努力としては、日本の社会・文化を構造する価値観、伝統的視点、歴史文脈、時代の変化に触れながら、地球規模のテーマを「自分ごと」として落とし込む仕掛けを作り続け、プログラムとしてのさらなる発展を試みたい。

#### 謝辞

本稿は、EGCについての一報告であり、執筆にあたっては、科目に関わった皆様から意見も頂きました。深く感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 定員倍増、再履修制度、及び、教室・人員の配置が整った場合を想定。
- 2) ジグソー法は、協働学習で使用されることの多いグループ学習の方法。数種類のテキストを複数の学習者が分担して読んでいく。個別での読解学習の後に、同じテキストを読んだ者同士でエキスパート・グループを形成し理解の確認をする。続いて、別のテキストを読んだ者同士で新しくジグソー・グループを作り、各々が読んできた内容や情報についてインタビューや報告をしあう。学び合いを通して、複数のテキストや全体像、情報の関係性について、共通理解を達成することを目指す。
- 3) レファレンス・サマリー (Reference Summaries) は、一般的には、Annotated Bibliographyとも呼ばれるアカデミック・エッセイの1ジャンル。導入部でテーマを紹介し、そのテーマについての論文・記事等の出典情報と300語程度の要約をいくつか並べ、結論部では、複数の文献の慣例性や学習成果を考察する。

#### 引用文献

- Agar, M. (1994). *Language shock: Understanding the culture of conversation*. New York: Perennial.
- Brown, J. D. (1994). *The elements of language curriculum; A systematic approach to program development*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Diaz, A. R. (2013). *Developing critical languaculture pedagogies in higher education*. Bristol, UK:

Multilingual Matters.

今井純子 (2017) 「内容言語統合型授業 (CLIL) における英語ライティング指導ー作文とディスカッションの内容分析ー」『順天堂グローバル教養論集』第2巻, 80-86頁.

今井純子 (2019) 「English for Global Citizenship: World 2030 (授業実践報告・指導案)」『SDGs 4.7 OPEN LAB らぼレポ』一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト 情報取得 : [https://sdgs.j-gift.org/english-for-global-](https://sdgs.j-gift.org/english-for-global-citizenship-world-2030/)

[citizenship-world-2030/](https://sdgs.j-gift.org/english-for-global-citizenship-world-2030/) (2020年9月22日) 文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会 (2018). 「ESD (持続可能な開発のための教育) 推進のための手引 (改訂版)」情報取得 : <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1405507.htm> (2020年9月22日)

Shaules, J. (2016). The development of model of linguaculture learning: An integrated approach to language and culture pedagogy. *Juntendo Journal of Global Studies*, 1, 2-17.